

美しきことのしづかに初蝶來

藤田湘子

「音楽を降らしめよ夥しき蝶に」と詠んだ湘子はきつと蝶が大好きな人。とりわけ初蝶との出会いの一瞬は心躍る刻。春浅き日、ふつと見れば目の前に小さなひらひらと動くもの。「あ！初蝶」と気付く。遠くに行きそうで行かずに、そのあたりを音もなく静かに舞っている。初蝶に出会う一瞬のその静けさの美しいこと。その日は一日幸せな気分で過せる。

「手毬歌かなしきことをうつくしく」と詠んだのは虚子。俳句にとって禁じ手とされている感情を表す言葉「かなし」「うつくし」が大手を振っていて、しかもその内容の深さに驚愕し共感した。虚子の句に惹かれるのと同じように湘子の掲句にも惹かれる所以である。

1983年 (558作) 第六句集『一個』 鑑賞・野本京